医療系大学における「健康体育」授業への車いすダンスの導入
―ユニバーサルスポーツの有効性―

川崎医療短期大学医療保育科
岡山大学大学院教育学研究科
秋政邦江[1)]・小野擴男[2)]

（平成22年９月29日受理）

Introduction of Wheelchair Dance into Physical Education Classes at Medical College
―Effectiveness of Universal Sports―

Kunie AKIMASA[1] Hiroo ONO[2]

[1)] *Department of Medical Nursing Childcara, Kawasaki College of Allied Health Professions*
316 Matsushima, Kurashiki Okayama, 701-0194, Japan
[2)] *Division of School Education,Graduate School of Education, Okayama University*
3-1-1 Tsushima-naka,Kita-ku, Okayama 700-8530, Japan
(Received on September 29, 2010)

概　　要

Ｋ医療短期大学Ｎ学科の「健康体育」の授業に車いすダンスを導入し，身体的な障害の有無に関わらず共に生きていくこと（共生）や「ノーマライゼーション」などを学ばせる。車いすダンスは障害のある人とない人がお互いの個性を理解し，お互いを尊重して行うダンスである。この車いすダンスを教材としての授業によって障害者スポーツや車いすに対するイメージや認識がどのように変化するかを，授業の前後に「車いすのイメージ」に関するアンケート調査を実施した。さらに車いすダンスの授業で経験した気付きを自由に記述してもらい，コード化してカテゴリーを抽出した。その結果，車いすダンスを行う前の車いすのイメージとして雰囲気，機能性，役割，形状，柔らかい，親近感の６つの因子が抽出された。つまり車いすは大きくて重く，操作しにくい器具で，全体的にはマイナスイメージであった。しかし，車いすダンス後では形状と柔らかいがなくなり，幸福感が抽出されて親近感，役割，機能性，雰囲気の５つの因子が抽出され，そのうち17項目において有意に高くなった。これらのことから，学生は車いすダンスをすることにより車いすをより身近な器具と認識し，車いすダンスは障害や障害者への理解を深める教材となりうることを事象する。

キーワード：車いす，授業，ユニバーサルスポーツ，イメージ，ダンス

Abstract

We introduced wheelchair dance to the class of "physical education" of the N Department at K Medical junior college, and let the students learn "live together" and about "normalization" regardless of the presence of a physical handicap.

"The image of a wheelchair" and "how the image and recognition of the wheelchair and

Correspondence to Kunie AKIMASA

disabled sports were changed", was investigated, and analyzed before and after the class.

The impression of the class of the wheelchair dance was freely described and was encoded for analysis. Then several factors composing individual images were extracted from the data: "atmosphere", "functionality", "part", "shape", "softness" and "intimacy".

Before the wheelchair dance class, the images of the wheelchair were generally negative, because it was large, heavy and hard to use.

However, after the wheelchair dance class, the factors of "softness" and "shape" had gone. Instead, the factor of "happiness" emerged and the number of factors decreased was reduced to five: "intimacy", "part", "functionality" and "atmosphere".

Taken together, we concluded that the students can perceive a wheelchair is more familiar to them after the wheelchair dancing which actually deepened their understanding of the physically disabled.

Key words: Wheelchair, Classes, Universal Spots, Image, Dance

1．はじめに

K医療短期大学N学科では一般教養の「体育実技」は基礎分野の「健康体育」へと編成され，2009年には選択科目となった。

必修科目での「健康体育」の授業を通して学生は医療，福祉，体育（運動，健康）に関する身近な問題を科学的に理解する。そして自らの健康観を問い直し「生涯スポーツ」を見据えた運動習慣の基礎を学ぶ。さらに授業や学生生活を通して他者と共に楽しむ方法や相互理解とコミュニケーション能力を高める。また，身体的な障害の有無に関わらず共に生きていくこと（共生）や「ノーマライゼーション」[1] などの理解をはかる。そのために，車いすダンスを通して，車いすが障害者にとって健康的で積極的な生活を送る器具であることを知る。つまり車いすにより障害者も健常者と変わらない存在であり，安井[2] らが指摘するように，障害者を異質な存在として理解し，社会的弱者として矮小化して捉えてはならないのである。車いすダンスを「健康体育」の授業に導入することにより，障害者スポーツや車いすに対するイメージや認識がどのように変化するかを授業前後にアンケート調査した。学生が車いすを健康的で明るい日常生活を実現する器具としてイメージしているか，それとも，車いすを特殊な医療，介護器具とイメージしているかを明らかにすることにより，車いすダンス（様々な個性や能力に関わらず，あらゆる人にとって楽しめるユニバーサルスポーツ）の「健康体育」教材としての意義を実証的に明らかにする。

2．調査の対象と方法

（1）調査対象と調査時期

調査時期は2008年4月の「健康体育」授業開始から6月の「車いすダンス」授業終了後にかけて2回行なった。対象は2008年4月にK医療短期大学看護科に入学した新入生134人（男子学生12人，女子学生122人）である。1回目の有効調査票回答は125人（有効回答率93%）であった。2回目の有効回答は126人（有効回答率94%）であった。短期大学であるため，大多数を女子学生が占めている。授業時に対象者に対して本アンケートは研究目的のために行うものであり，アンケートの結果は統計処理した上で使用することを説明した後に本人の同意を得た上で実施した。アンケートは自己記入後直ちに回収した。

（２）調査内容

①アンケート用紙

調査項目は，性別，車いすに対する経験度，車いすに対するイメージである。イメージは車いすの形状，機能性，役割，雰囲気から連想される（小さい―大きい）（軽い―重い）（柔らかい―硬い）（低価格―高価格）（自由―不自由）（便利な―不便な）（普通な―特殊な）（暖かい―冷たい）（速い―遅い）（簡単な―難しい）（安全な―危険な）（楽しい―苦しい）（健康的―不健康）（開放的―閉鎖的）（幸せな―不幸な）（敏感な―鈍感な）（心強い―心細い）（優しい―厳しい）（役立つ―役立たない）（活発な―おとなしい）（親切な―不親切な）（身近な―疎遠な）の22項目とした[3]。各項目はプラスイメージ「たいへんそう思う（５点）」「ややそう思う（４点）」「ふつうそう思う（３点）」からマイナスイメージ「ややそう思う（２点）」「たいへんそう思う（１点）」の５段階に分け，点数を付与した。分析には統計ソフトSPSSを使用した。なお，５％未満の危険率の場合を有意とした。

②自由記述

車いすダンスを導入した「健康体育」授業で経験した気付きを学生が自由記述し，それをデータとして分析した。分析は複数の研究者で協議し信頼性，妥当性を確保した。やまだ[4]はデータの信頼性について「数量的データは，相互一致性があるほど信頼性の高い良いデータになるが，質的データは新しい変数が発見できるほど良いデータ」であると述べている。また，記述は他者に読んでもらい，論の立て方や解釈などの記述について評価し，そのデータを意味のある文節に区切り，コード化を行った。各概念が的確にデータを表しているか吟味し，意味内容の類似性に基づいて分類することで，サブカテゴリー，カテゴリーが抽出され，概念に忠実に反映するネームをつけた。なお，質的データの真実性と厳密性を確保するために，データの解釈に当たっては，筆者らにより解釈手続きやコード化並びにカテゴリー化の方法に関し相互理解を得た上で，コード化からカテゴリー化の分類と確認を行った。

３．結果

（１）車いすダンス授業前の車いすのイメージ

①因子分析（表１）

車いすのイメージについての22項目による信頼性は，α係数が0.83と高かった。KMOの標本妥当性の測度が0.74と0.5より大きく，Bartlettの球面性検定の結果も有意であった。以上のことから，車いすのイメージ項目に対して因子分析を施す意味合いがあった。アンケートの集計結果を因子分析にかけた。分析では因子の抽出は主因子法により，回転はバリマックス回転を行い，６つの因子が抽出された。累積寄与率44.14％であった。因子分析の結果は表１に示す。因子分析で得られた６つの因子は第１因子を「雰囲気」，第2因子を「機能性」，第３因子を「役割」，第４因子を「形状」，第５因子を「柔らかい」，第６因子を「親近感」と名づけた。表１にあるように各下位尺度のα係数は第６因子がマイナスで，第４因子がやや低かったが，項目の内容や前述の妥当性の測度や球面性検定の結果から分析に問題ないと判断した。

②イメージの値（表２）

各項目の人数分布，平均値，標準偏差を因子分析の因子順に表２に示す。学生の車いすのイメージは，「大変そう思う（１点）」と「ややそう思う（２点）」を合わせると３点以下が過半数を超え，雰囲気の８項目「優しい」，「楽しい」，「心強い」，「幸せな」，「開放的」，「敏感な」，「暖かい」，「速い」，機能性の５項目「自由な」，「便利な」，「簡単な」，「軽い」，「普通な」，形状

表１　授業前の車いすイメージの因子分析

因子	項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
雰囲気	優しい	0.726	0.002	0.352	−0.105	0.032	0.088
	楽しい	0.591	0.292	−0.002	−0.026	0.284	−0.233
	心強い	0.556	0.258	0.319	0.159	0.081	0.045
	幸せな	0.505	0.170	0.086	0.347	−0.162	−0.122
	開放的	0.491	0.230	0.214	0.271	0.002	0.047
	敏感な	0.450	0.048	0.014	0.179	0.013	0.056
	暖かい	0.417	0.115	0.061	−0.132	−0.045	0.173
	速い	0.396	0.342	0.059	0.037	−0.046	0.090
機能	自由な	0.214	0.752	0.100	−0.040	0.050	0.014
	便利な	0.254	0.704	0.266	−0.053	−0.080	−0.095
	簡単な	0.124	0.436	0.205	0.260	0.149	−0.072
	軽い	−0.030	0.360	−0.065	0.034	0.267	0.015
	普通な	0.275	0.336	0.113	0.007	−0.026	0.285
役割	役立つ	0.020	0.250	0.691	0.036	−0.103	0.003
	親切	0.176	−0.045	0.567	0.124	−0.021	0.089
	活発	0.253	0.320	0.435	0.019	0.091	0.105
形状	健康的	0.235	−0.012	0.013	0.692	−0.079	0.134
	小さい	−0.020	0.037	0.153	0.504	0.234	−0.142
柔らかい	柔らかい	−0.020	0.102	−0.047	0.074	0.883	0.268
親近感	低価格	−0.020	−0.064	0.028	−0.047	0.144	0.490
	安全な	0.282	0.234	0.347	0.091	0.051	−0.474
	身近な	−0.020	0.225	0.233	0.132	0.060	0.473
寄与率(%)		21.524	6.100	4.963	4.274	4.191	3.09
累積寄与率(%)		21.524	27.624	32.588	36.869	41.053	44.143
α係数		0.7881	0.687	0.6312	0.4563		−0.2012

の２項目，「健康的」，「小さい」，柔らかいと親近感の３項目「低価格」，「安全な」，「身近な」を構成する19項目がマイナスイメージであった。特に「低価格」は平均値が1.9点と低かった。しかし，役割の３項目「親切」，「役立つ」，「活発な」は３点以上であり，プラスイメージであった。

③車いす経験度とイメージ（表３）

学生は医療系短期大学ため，高校生時にボランテアや実習等などで車いすに関わった経験がある学生が95人（76%）と多かった。表３に示すように，車いすを経験したことのある学生は機能性の「簡単な」と親近感の「安全な」の項目以外で，車いすに関わったことのない学生よ

表２　授業前の車いすのイメージの人数分布と平均得点

因子	＋	たいへん 5点	やや 4点	ふつう 3点	やや 2点	たいへん 1点	－	平均	標準偏差
雰囲気	優しい	3	17	77	20	8	厳しい	2.90	0.80
	楽しい	1	8	62	41	13	苦しい	2.54	0.80
	心強い	7	27	52	26	13	心細い	2.91	1.03
	幸せな	5	10	73	28	9	不幸な	2.79	0.85
	開放的	5	12	58	37	13	閉鎖的	2.67	0.93
	敏感な	1	13	75	28	8	鈍感な	2.77	0.75
	暖かい	0	9	73	32	11	冷たい	2.64	0.74
	速い	1	11	46	56	11	遅い	2.48	0.81
機能性	自由	0	13	26	54	32	不自由な	2.16	0.93
	便利な	6	24	39	39	17	不便な	2.70	1.08
	簡単な	7	20	40	40	18	難しい	2.66	1.08
	軽い	0	6	25	62	32	重い	2.04	0.81
	普通な	2	14	74	25	10	特殊な	2.78	0.81
役割	役立つ	34	49	34	5	3	役立たない	**3.85**	0.95
	親切な	7	26	80	11	1	不親切な	**3.22**	0.71
	活発な	6	21	72	19	7	おとなしい	**3.00**	0.86
形状	健康的	4	12	71	31	7	不健康	2.80	0.81
	小さい	3	6	57	48	11	大きい	2.54	0.82
柔らかい	柔らかい	1	4	46	52	22	硬い	2.28	0.82
親近感	低価格	2	3	19	58	43	高価な	1.90	0.86
	安全な	2	22	56	35	10	危険な	2.77	0.89
	身近な	4	32	53	25	11	疎遠な	2.94	0.97

りも有意に高かった。さらに，役割の項目「親切」,「役立つ」,「活発な」で平均値が3点以上であった。また雰囲気の「優しい」と機能性の「自由」,「普通」の３項目で有意差があった。

（２）車いすダンス授業後の車いすイメージ

①因子分析（表４）

車いすダンス後の車いすのイメージについては，22項目による信頼性は，α係数が0.90と高かった。KMOの標本妥当性の測度が0.85と0.5より大きく，Bartlettの球面性検定の結果も有意であった。以上のことから，車いすのイメージ項目に対して因子分析を施す意味合いがあった。因子分析は主因子法とバリマックス回転を行い，５つの因子が抽出された。累積寄与率49.69%であった。

因子分析の結果は表４に示す。車いすダンス授業後のアンケートでの因子分析では５つの因子が抽出された。第１因子「親近感」，第２因子「役割」，第３因子「幸福感」，第４因子「機能性」，第５因子「雰囲気」の３項目となった。車いすダンス前の因子分析では第１因子「雰囲気」，第２因子「機能性」，第３因子「役割」，第４因子「形状」，第５因子「柔らかい」，第６因子「親近感」の順位であった。また，因子項目では車いすダンス前後で以下のように変化した。また，車いすダンス後は「形状」と「柔らかい」が抽出されずに，「幸福感」の因子が抽出された。因子の順位が車いすダンス前は「雰囲気」第１因子であったが，車いすダンス後は

表３　授業前の車いすの経験度とイメージ

因子名	項目	関わったことがある（95人）		関わったことがない（30人）		経験の比較
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	有意差
雰囲気	優しい	2.99	0.81	2.60	0.72	＊
	楽しい	2.56	0.77	2.50	0.90	
	心強い	2.96	1.05	2.77	0.97	
	幸せな	2.81	0.80	2.73	0.98	
	開放的	2.72	0.91	2.53	1.01	
	敏感な	2.77	0.78	2.77	0.68	
	暖かい	2.66	0.68	2.57	0.94	
	速い	2.55	0.85	2.27	0.64	
機能性	自由	2.25	0.94	1.87	0.82	＊
	便利な	2.75	1.07	2.57	1.10	
	簡単な	2.64	1.09	2.73	1.08	
	軽い	2.08	0.81	1.90	0.80	
	普通な	2.92	0.78	2.37	0.76	＊
役割	役立つ	3.91	0.91	3.67	1.06	
	親切な	3.22	0.72	3.20	0.71	
	活発な	3.04	0.85	2.87	0.90	
形状	健康的	2.81	0.79	2.77	0.90	
	小さい	2.60	0.80	2.33	0.84	
柔らかい	柔らかい	2.32	0.82	2.17	0.83	
親近感	低価格	1.95	0.83	1.77	0.94	
	安全な	2.75	0.85	2.83	1.02	
	身近な	2.99	1.01	2.80	0.85	

（＊＊:0.01 , ＊:0.05）

「親近感」なった。

②イメージの値（表５）

各項目の人数分布，平均値，標準偏差を因子分析の因子順に表５に示す。車いすダンス授業後はダンス前よりも17項目が有意に高くなったが，「大変そう思う（１点)」と「ややそう思う（２点)」を合わせると車いすダンス授業前と同じく３点以下が過半数を超えた。また，前回のアンケートと同様に親近感，役割，幸福感，機能性，雰囲気の因子を構成する19項目がマイナスイメージの項目であった。さらに親近感の項目である「低価格」は車いすダンス前と同じく有意に低く，車いすは高価なイメージである。また，３点以上は車いすダンス前と同様に親近感の「親切」と役割の「役立つ」,「活発な」の３項目であった。しかし,「親切」と「役立つ」の項目は車いすダンス後に微小であるが低くなっている。

③自由記述のコード化とカテゴリー化（表６）

車いすダンス授業後に学生が自由記述した内

表４　授業後の車いすの因子分析

因子名	項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
親近感	柔らかい	0.687	−0.008	0.073	0.121	0.234
	低価格	0.664	0.060	0.108	0.109	−0.206
	小さい	0.660	0.035	0.115	0.143	0.062
	軽い	0.649	0.085	0.017	0.126	0.278
	身近な	0.461	0.277	0.234	0.003	0.088
役割	親切な	0.046	0.730	0.171	0.190	−0.058
	役立つ	0.116	0.637	0.055	0.152	0.152
	優しい	0.027	0.600	0.375	0.112	0.125
	心強い	0.022	0.559	0.249	0.223	0.363
	活発な	0.275	0.416	0.311	0.182	0.312
幸福感	健康的	0.094	0.099	0.714	0.121	0.119
	開放的	0.097	0.206	0.671	0.186	0.218
	幸せな	0.141	0.251	0.659	0.160	0.018
	楽しい	0.204	0.316	0.509	0.367	0.122
	自由な	0.057	0.136	0.268	0.756	−0.024
機能性	便利な	0.095	0.266	0.121	0.621	0.228
	速い	0.219	0.123	0.311	0.515	0.452
	簡単な	0.383	0.196	0.086	0.508	−0.019
	安全な	0.192	0.406	0.316	0.407	0.139
	普通な	0.349	0.106	0.069	0.403	0.186
雰囲気	暖かい	0.172	0.271	0.226	0.081	0.370
	敏感な	0.161	0.213	0.242	0.145	0.329
寄与率（%）		31.272	7.938	4.113	3.902	2.459
累積寄与率（%）		31.272	39.211	43.324	47.226	49.685
α係数		0.778	0.806	0.812	0.815	0.462

容を精読し，車いすとダンスの感想を抽出した。表６に示す自由記述から意味のある文節に区切り，コード化を行なった。データの文脈を確認しながら比較と類型化を行い14個のサブカテゴリーが抽出された。さらに，［車いすの多機能性］，［車いすの操作と感覚］，［車いすの利便性］，［ツールとしての車いすダンス］，［運動の特性］，［障害者への理解］，［ユニバーサルスポーツへの発展］のカテゴリーが抽出された。

（３）車いすダンスをする前と後とのイメージ比較

車いすダンスの授業をする前後では車いすのイメージの17項目が有意に高くなり，車いすのイメージがプラスへと変化した。さらに親近感の項目である「やわらかい」，「低価格」，「小さい」，「軽い」の４項目はプラスへシフトした。また，車いすダンス後は，親近感の「柔らかい」「低価格」，「小さい」，「軽い」，役割の「優しい」，「心強い」，「活発な」，幸福感は「開放的」，「幸

表５　授業後の車いすのイメージの人数分布と平均得点

因子	＋	たいへん 5点	やや 4点	ふつう 3点	やや 2点	たいへん 1点	－	平均	標準偏差
親近感	柔らかい	0	7	58	40	21	硬い	2.40	0.83
	低価格	1	4	40	38	43	高価な	2.06	0.93
	小さい	3	6	57	48	11	大きい	2.62	0.87
	軽い	4	22	39	45	16	重い	2.63	1.01
	身近な	4	20	71	21	10	疎遠な	2.90	0.88
	親切な	4	25	81	12	4	**不親切な**	**3.10**	0.74
役割	**役立つ**	20	48	48	5	5	**役立たない**	**3.58**	0.94
	優しい	3	24	74	16	9	厳しい	2.97	0.84
	心強い	4	33	58	20	11	心細い	2.99	0.95
	活発な	2	29	70	18	7	**おとなしい**	**3.01**	0.82
	健康的	1	15	73	24	13	不健康	2.74	0.83
幸福感	開放的	3	16	59	35	13	閉鎖的	2.69	0.91
	幸せな	1	12	86	18	9	不幸な	2.83	0.73
	楽しい	2	17	72	25	10	苦しい	2.81	0.83
	自由	3	16	41	43	23	不自由な	2.47	1.01
機能性	便利な	7	29	43	32	15	不便な	2.85	1.08
	速い	3	19	60	33	11	遅い	2.76	0.90
	簡単な	4	24	57	29	12	難しい	2.83	0.95
	安全な	4	25	52	31	14	危険な	2.79	0.99
	普通な	0	10	77	29	10	特殊な	2.69	0.73
雰囲気	暖かい	1	17	69	34	5	冷たい	2.80	0.75
	敏感な	2	13	77	32	2	鈍感な	2.85	0.68

せな」，「楽しい」，「自由な」，機能性の「便利な」，「速い」，「簡単な」，「安全な」，雰囲気の「暖かい」，「敏感な」の17項目が有意に高い。しかし，車いすダンス後においては従来はプラスイメージであった親近感の「身近な」，「親切な」と役割の「役立つ」，「健康的」さらに機能性の「普通」の５項目で，ダンス前に比べ微小ではあるが低くなっている。

４．考察

第１回目の調査を入学直後の４月に実施したが，看護科を希望して入学した学生のため，何らかの形で学生は車いすの体験があり，車いすに対するイメージは体験者のイメージであるともいえた。学生の車いすに対するイメージは医療機関や福祉では「役立つ」「親切な」器具と捉えていると推察していたが，アンケート結果では機能，雰囲気，形状ではマイナスのイメージが強く，特に車いすの「価格」では大変高価であると感じている。学生にとっては車いすを医療機関や福祉施設での治療や介護の補助器具として利用するには重くて大きく不自由な器具のイメージが強いようである。価格や機能についての学生のイメージは現実を一定反映しており，車いすはもっと低価格で，機能性を高めたものにする必要がある。

車いすダンス授業前のアンケートでは，医療機関や福祉施設で活躍する学生にとっては，車

表６　学生の自由記述

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
車いすの多機能性	車いすの種類の多さと使用場面	車いすの種類が多くあり、便利であることがわかった。
		車いすの種類が多くあることに驚いた。
		車いすは使用する場面で作りが違い、種類が多かった。
	スポーツ用車いすの機動性	介護用の車いすに乗った事があるが、スポーツ用の車いすは思っていたより速く動き易い。
		車いすに初めて乗ってみると意外に軽く動き、速かった。
		スポーツ用の車いすは機敏に動き、軽い感覚がよく分かった。
車いすの操作と感覚	車いす上での気持ち	車いすは自分で動かすにはしんどく、乗りにくかったが人に押してもらうと楽であった。
		今回の車いすでは、何も違和感を感じることがなく、普通にとらえることができた。
		動かしにくかったが、実際に乗っている人の体験ができた。
	車いす操作の方法と難しさ	車いすの回転やジグザク走法などもできることがわかり、勉強になった。
		車いすでの移動は操作が難しく、腕が疲れて大変であった。
		車いすは乗ってみると速くて便利だったが、段差があると動きにくかった。
		車いすに乗るのは特に急いで移動する時は不便であった。
	車いすで移動する時の不自由さと危険性	車いすは動作が遅く不自由だと感じた。
		段差などに引っかかった時など、転倒しそうになり危なかった。
		地域に出ると、車いすだけでの移動は危険がありそうに思う。
	車いすが動いた時の不安と恐怖感	車いすはすごく怖く、できれば、もう乗りたくないという経験をした。
		スポーツ用の車いすは乗り始めは怖く、慣れるまで不安でした。
		スポーツ用の車いすは案外すばやく動けたが、転ぶのが怖い。
車いすの利便性	車いすが足となって生活の質が向上	車いすが不自由な人の生活の質を高めていることがわかった。
		車いすは足が不自由な人にとっては、足のかわりになり、とてもすごいと思った。
		車いすが不自由な人の足となって、救っている。
		車椅子は、不自由な人にとって大切な体の一部だと思う。
		車いすは障害者にとっては足にかわるものなので、健常者が遊びで使ってはいけない。
ツールとしての車いすダンス	車いす利用者とのコミュニケーション	車いすがあることで障害のある人たちとも交流ができるのですごいと思った。
		車いすの人とダンスすることでよりコミュニケーションになると思った。
	車いす上のイメージや目線の変化	車いすでダンスなどをして、車いすへのイメージが変わった。
		車いすにのることで、目線や目先が変わって、楽しかった。
運動の特性	ダンスの楽しさ	車いすのダンスはやったことがなかったので新鮮でした。
		車いすは思いどおりに動かないので、ダンスで息を合わせるのが難しいが、楽しかった。
		高校の時にボランティアで車いすに乗ったことがあるが、その時と違い今回の車いすダンスは楽しかった。
		スポーツ用の車いすの操作は少し難しかったが、乗って楽しかった。
	車いすでのダンスやスポーツの難しさ	踊りのために車いすにはもう乗りたくない。
		手だけで、車いすを動かしてダンスは分かりにくく、大変であった。
		初めて車いすダンスをして、ペアーやグループで踊ることの難しさがわかった。
		車いすに乗って初めて体育をして難しかった。
障害者への理解	障害や障害者への理解	車いすに乗って、障害者の気持ちが少し理解できた様に感じます。
		実際に乗ってみて、車いす利用者の方の気持ちが少しわかった。
	車いす利用者への親近感	いざ車いすに乗っている人を見かけても何をしたらいいのかわかりませんでしたが、自分なりにできることをしたいと思うようになった。
		車いすダンスをしたことで、車いすを身近に感じ、偏見がなくなった。
		車いすはとても難しいかつた。車いすに乗って困っている人がいれば手伝おうと思った。
ユニバーサルスポーツへの発展	車いすダンスを通して他のスポーツへの展開	車いすを使ったダンスなどできて、素晴らしいとおもった。リレーなど楽しいスポーツもできる
		車いすは介助のためだけでなく、スポーツやダンスにも使えることがわかり、幅広く活用することが大切だと思った。
		車いすダンスではなく、車いすバスケをしたかった。
		車いすは楽しかった、車いすのスポーツをたくさんしてみたいと思った。
		車いすがあれば不自由な人もスポーツやダンスなど、楽しい事に参加できていいと思った。

いすは日常的ではなく怪我の治療の一環としての器具，または病気で歩行困難な人の移動器具と捉えている。しかし，ボランティアやアルバイトで車いすに関わった体験のある学生では，車いすのイメージは障害をもっている弱者にとっては役立つ器具で，生活を自由にする優しい器具としてプラスイメージとして捉えている。これらのことから，将来医療機関や福祉施設で活躍する学生に車いすの実技経験させることは必要であり，さらに車いすを通して「ノーマライゼーション」や「共生」を理解することになると考えた。

車いすダンス授業後での車いすのイメージ調査では，学生は車いすのイメージを，「心強く」，「役に立つ」，「機能的」な器具である捉えていた。しかし，学生の自由記述では車いすの操作は難しく転倒しそうになり，慣れるまでは不自由で不安だと感じていた。栗原[5]らは「車椅子を体験学習することにより学生は困難さや恐怖感が強まった」と報告している。また，「何度か車いすを体験することにより，容易に操作でき，恐怖感が薄らいだ」とある。実際に，学生は車いすダンスで操作を繰り返すうちに，自由に操作できようになり，ダンスすることにより心が解放された気持ちとなり，楽しかったようである。そのため，漠然と感じていた車いすのイメージであった形状や機能などは気にならなくなり，車いすに親近感をいだいたようである。さらに，車いすダンスを経験することにより車いすは遠い存在ではなくより現実的で身近な存在として捉えるようになっていると考えられる。

車いすの操作は何度か経験することにより経験知を高めることが重要であると推察する。小野[6]は「体験が経験となることが重要なのである。経験が始まるのは体験が“概念”へともたらされ，体験の意味内容が意識化され分節化され，そこに何か新たなものが示される。」また，「異なるやり方を知ることは，慣れ親しんできたものを新たにより深く理解することにつながり，異なるやり方を通してはじめて興味や認識が喚起される。」と述べている。車いすの操作は何度か経験することにより経験知を高めることが重要であろう。学生はボランティアなどで車いすを体験している。車いすダンスの授業を通して示された車いすイメージの変化（「大きくて重く」，「不便」から，「あたたかく」「役に立つ」）が，それまでの単なる体験が経験へと導かれたことを示すものといえる。

車いすは障害を持った人の生活の質を向上させ，自分たちの身近に役に立つ道具として認識するようになった様である。学生はコミュニケーションや交流するツールに車いすダンスがなると感じている。また，学生は車いすを押して介護するのではなく，車いすに乗ることによりいろいろなものを見る視点や目線が変化し，障害や障害者への理解を深めたようである。つまり，学生は車いすダンスをすることにより車いすをより身近で役に立つ器具と認識した。これらのことから，車いすダンスは障害や障害者への理解をする教材となると推察できる。さらに，車いすダンスやユニバーサルスポーツを通して地域と交流することを考えている。

参考文献

1）花村春樹：（訳著）『ノーマライゼーションの父 N・E・バンク－ミケルセンその生涯と思想』ミネルヴァ書房：66，1994

2）安井友康，時政孝司：障害者とのスポーツ交流実践の効果―車椅子バスケットボールへの参加が学生の意識に与える影響．北海道教育大学紀要49：207-213，1998

3）片山章朗，秋政邦江，伊藤智里：手動式車椅子に対する学生のイメージ調査の報告．教育保健研究　14：2006

4）やまだようこ：（編）『現場心理学の発想』新

曜社：161-186，1997
5）栗原トヨ子，寺山久美子，木之瀬隆，大津慶子，新田収：車椅子体験学習における学生の反応．東保学誌Vol. 3 ：199-203，2001
6）小野擴男：ヨーロッパ連合（EU）における共生教育－自然（タンポポ）をテーマとした授業の分析．奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要12：87-97，2003